

龍司と美歩は、渋谷E2から
脱走しようと目論んでいる。

新世界ゼロ年

第79回

貴志祐介 (画) 藤田新策



承前

渋谷EZは、外敵が迫った蜂の巢のような騒ぎになっていた。

龍司と美歩は、気配を殺して歩く。

「なあ、今は、ちょっとマズいんじゃないか？」

龍司は、声を殺して言った。

「新宿EZと闘いが始まりそうだから、みんな殺気立ってる。もし俺たちが逃げようとしてるって気づかれたら、タダじゃすまないぞ」

美歩は、軽蔑するような視線を向けただけだった。

「俺たちも、その原因の一端を作ったんだしさ。周りからは相当敵しい目で見られてると思っただ方がいい」

美歩は、立ち止まって、ふんと鼻息の音を立てる。

「わたしたちが生還したときは、英雄扱いだったじゃない」

「あのときは、状況が違う。今は、マジで開戦五分前だ。口には出さないけど、誰も、手塚不律と戦いたいと思ってるやつはいないからな。緊張を高めたことで、恨まれてるかもしれない」

「新宿の魔王子を怒らせたのは、吉村真二郎って悪鬼でしょう？」

「悪鬼かどうか、わからねえよ」

龍司は、ぼやいた。

「悪鬼なら、死ぬまで暴れ回るはずだから、とつくに決着が付いてる。途中で消えるっていうのはおかしい。手塚不律が、渋谷EZの陰謀だと思ひ込むのも無理ないよ」

「なんで、あのサディストのサイコパスの肩を持つの？」

美歩は、辛辣^{しんれつ}だった。

「別に、肩は持っていないよ」

龍司は、いつもながら防戦一方だった。

「いい？ たしかに、今はマズいわよ。だけど、この先は、もっとマズくなるの。戦争が始まったら、敵前逃亡は即死刑よ。逃げるなら、今しかない」

しかたがない。龍司は溜め息をついた。美歩は言い出したら絶対聞かないし、今さら、別行動を取るわけにも行かない。一か八か^{ばち}、逃げるしかない。

それにしても、逃げてばかりいるような気がするが……。

二人は、渋谷ヒカリエのエスカレーターに乗った。今はまだ電力が供給されているが、それも絶たれたら、地上三十四階もあるビルは不便の上ないだろう。

九階に着くと、イベントホールから、大勢の人が踊り回っているような音がした。

龍司と美歩は、顔を見合わせる。幸運だったかもしれない。足を速めたところで、突然背後から声をかけられた。

「よう。どこへ行くんだ？」

振り返ると、顔なじみの渡瀬^{わたなせ}という少年だった。背が高くガーディアン・エンジェルの制服を着ているが、手には自動小銃を持っていた。

「マコちゃんに会いに来たの」

美歩が、正直に答える。

「魔王子の許可は取ったのか？」

「もちろん」

これで、嘘がばれるまでの秒読みが始まってしまった。その前に、うまくマコちゃんを連れ出して、姿をくらまさなければならぬ。

「ふうん」

さいわい、渡瀬は疑った様子ではなかった。

「もうすぐ、戦争だ。相手が新宿だからな。魔王子と春彦はるひこの二枚をぶつけても、勝てるかどうかわからねえな。マコちゃんだっけ？ あの子も戦力だそうだ」

「えっ。そんな」

まさか、幼児を最前線に送るつもりなのか。

「ふっ。あの子は、おまえらが見てない間に相当な怪物に育ってるよ。まあ、自分の目で見てみるよ」

渡瀬は、そう言うと、下りのエスカレーターに乗って行った。

「さあ、今のうちよ」

美歩が言い、二人は、早足でイベントホールに入った。

そして、数十人が狂ったように走り回っている光景に絶句する。

「何だ、これ？」

龍司は、恐怖に駆られていた。彼らの動きが、この世のものとも思えなかったからだ。

両腕を滅茶滅茶に振り回しながら、両脚を霞むほどの速度で動かし突進する。最後は、走り幅跳びのような大ジャンプを見せ、頭からぶつかるような姿勢を取る。

次の列は、二人一組になって走っていると、一人が踏み台になり、もう一人が空中高く飛び上がった。さらに、数人が一組で、組み体操のような姿勢から、弾頭役の人間を抛り投げた。

いずれも、空中で見えない手に抱き留められ、床に下ろされると、また走って行って、最後尾に並ぶ。

これは、生きた人間の肉体を兵器に変える練習だ……。

二人は、彼らの姿を息を呑んで見つめていたが、ホールの奥に佇んでいる小さな人影に気がついた。

「マコちゃん！」

美歩が呼びかけると、人影は、こちらに気がついたようだった。

そのとたん、さっきまで倍速で動いていた兵士たちは、糸が切れた操り人形のように、その場に崩れ落ちる。

マコちゃんが、嬉しそうに駆け寄ってきた。初めて出会ったときと比べて、身体はそれほど大きくなくなっていないが、表情はかなりしっかりしてきたようだ。

「何してるの？ ダンスの練習？」

マコちゃんは、黙って首を振る。言葉はまだ、うまく発せないようだ。

「敵をやっつける練習してるんだよね？」

龍司が言うと、笑顔でうなずいた。美歩は、悲しそうな顔を見せたが、すぐ笑顔を作り直した。「ねえ、今から、お姉ちゃんたちと、ちょっと出かけない？」

マコちゃんは、真顔になって、首を横に振った。しっかき練習をしろと言いつけられているの
だろう。

「だいじょうぶ。魔王子の許可は取ってあるから。少しだけ、休憩」

マコちゃんは、どうしようかと迷っているように、イベントホールの中を見回した。

「行きましょう。ね？」

美歩が手を差し出すと、マコちゃんは笑顔になり、小さな手で握った。

龍司は、床に倒れている兵士たちを見渡す。どう見ても、追ってきたり、ご注進に走ったりできそうなやつはいなかった。

三人がイベントホールを出ようとしたときだった。前から来る少年の姿にぎくりとする。白い仮面を付けているため、顔はわからない。

「何してる？」

二人がよく知っている声——春彦だった。

「うん。ちょっと、マコちゃんと散歩に行こうと思って」

美歩が笑顔で答えたが、ひどく白々しく響く。

「散歩？ どこまで？」

「そんな遠くへは行かないけど」

「関東地方は出ないということか？ 東北に行けば権現ごんげんの支配下だけど、中部は恐ろしいことに

なってるらしいぞ」

「何言ってるの？」

美歩は、笑いで誤魔化ごまかそうとしたようだが、声が引き攣ひきつっていた。

「三人で、逃げる気なんだろう？」

「まさか」

美歩の手を握りしめているマコちゃんが、心配そうに彼女の顔を見上げた。

「わかってるのか？ おまえら二人は、恰れお央から死刑を言い渡されてるんだぞ？ 今は、執行猶しつこうゆう

予よ中だ。今にも戦争が始まろうっていうときに逃亡したら、即処刑される」

これ以上、誤魔化ごまかそうとしても無意味だろう。龍司は、一歩前に進み出た。

「頼む。見逃してくれ」

春彦は無言だった。

「俺たちは、もう、ここにはいられない。逃げるしかないんだ」

「ふうん。……冷たいな」

「え？」

「俺たちは、ずっと仲間だっただろう？ 俺には、一言も声をかけてくれないのか？」

「それは……」

「前も、俺を置いて逃げたよな？ 今さら、驚かないが」

「一緒に行く？」

美歩の声に、一瞬、希望の灯がともった。

すると、仮面の下から笑い声が漏れた。

「おまえらが、俺を最低のエゴイストだと思ってることは、よくわかったよ。しかしな、このタイミングで怜央を裏切るのはあんまりじゃないか？」

「そりゃ、そうだけど……」

「ここで俺が抜けたら、怜央は不律に負ける。渋谷は皆殺しに近い懲罰ちやうばつを受けるだろうな。そうなるのがわかって逃げ出すっていうのは、さすがにありえねえよ」

「でも、おまえは、怜央を殺すつもりだったじゃないか？」

龍司は、懸命に反論する。

「だったら、不律に殺させても、同じことだろう？」

龍司は、自分がここまで非情なことを言えるとは思っていなかった。だが、今の時代を生き抜くためには、あえてエゴイストになるしかない。

「たしかに、そうだったな」

春彦は嘆息する。

「でも、俺が怜央を殺すときは、おまえも協力するはずだったじゃないか？ おまえの光でやつに目潰しを喰らわせて、その隙すきに俺が仕留める。……それなのに、おまえがいなくなったら、俺には勝ち目がない」

「それは、悪かったと思う、でも、俺たちには、こうするしか」

懇願しようとした龍司を、美歩が荒々しく遮さへぎった。

「あんたたちは、マコちゃんを、手塚不律と戦わせようとしてたじゃない！ そんなこと、許す

わけにはいかないわよ！」

「それが動機か？」

「えっ？」

「本当に、それが、逃げ出す動機だったのか？」

春彦は、皮肉な口調で追及する。

「そんなこと、さっき、ここへ来るまで知らなかったんじゃないか？ おまえらは、ただ、その子を連れに来ただけだろう？ それで、さっきの練習を見て、今、俺に対して口実に使ってるわけだ。新海^{しんかい}。おまえは、おそらく、この子を連れて行くことすら迷っていたんじゃないのか？」

一言もなかったので、龍司は、ただうなだれるしかなかった。

「まあいい」

春彦の声のトーンが、急に変わった。

「どうということ？」

美歩が、緊張した声で訊ねる。

「さっさと、行けよ」

「いいのか？」

信じられずに、龍司は念を押した。

「まさか、俺が、おまえらを捕まえて、恰央に引き渡すとも思うのか？」

仮面を被^{かぶ}っていても、春彦は昔と同じ春彦だった。

「ごめん。……おまえを誘うかどうか、迷ったんだ」

「いいよ。さっさと行け」

春彦は、後ろを向いて、面倒臭そうに手を振った。

「ああ、わかった。それじゃ、また会おう」

三人は、イベントホールを出た。エスカレーターに乗ろうとしたとき、誰かが上がってくるのに気付く。

春彦と同じ白い仮面を被っている。どうやら、幹部たちは、敵から見分けが付きにくいように同じ仮面を被ることにしたらしい。

だが、今日の前に現れたのは、最悪の相手だった。

「おまえたち、どこへ行く？」

藤倉^{ふじくら}恰^{ちやう}央^{おう}の声は静かだったが、裡^{うち}に咎^{とが}めるような刺^{さし}がひそんでいる。

「ええ、ちよつと、気分転換に」

美歩^{みほ}が言い訳をしたが、すでに言葉に力がなかった。

「その子には、百人を同時に操れるようになるための課題を出してあつたはずだ。勝手に持ち場を離れていいと、いったい誰が許可したんだ？」

三人が立ち竦^{すく}む前に、恰^{ちやう}央^{おう}がエスカレーターから降り立つ。

「悪い。俺^{おれ}がいつて言ったんだよ」

背後から春彦が現れて、恰^{ちやう}央^{おう}に向かって言う。

「しばらく会ってなかったようだし、その子のモチベーションを上げるのも大切だろうと思って

さ」

「それで、ちょっとそのあたりを散歩して、またここに戻ってくるつもりだったと？」
「そうです」

龍司は、低い声で言う。簡単に許してもらえとは思えないが、それでも、しらを切り通す以外に助かる道はない。

「おまえら全員、俺を馬鹿だと思ってるようだな」

怜央は、嘆息した。

「それを信じると、本気で思うのか？」

「信じられないのは、わかる。でも、信じてくれ」

春彦が、うつむき、くぐもった声で言う。

「信じられねえよ」

怜央は吐き捨てたが、声にはさほど感情がこもっていない。龍司には、それがかえって恐ろしかった。すでに、どうするか決めているような気がするからだ。

「だが、信じるしかないだろう？」

春彦は、顔を上げた。

「ああ？ 何だって？」

怜央の声音に怒りが顕れた。

「こいつら三人を、どうするつもりだ？」

怜央は、声に怒りを滲ませたまま笑う。

「もともと、その二人は死刑だと言ってあったはずだ。ただ、しばらくの間、執行を猶予してた

「ただだ」

「それで？」

「執行猶予は取り消す」

怜央は、かすかに首を振る。

「じゃあ、二人を殺すのか？」

「そうだ」

怜央は、間合まあいを計るように、龍司と美歩を見た。

「しかし、そうになると、その子は二人の味方をするだろう」

春彦は、淡々と言う。

「そして、俺も、そうせざるを得ない。こいつらは、ダチだからな」

「じゃあ、死刑は四人だな」

「もちろん、俺たち四人では、おまえには敵かたわない。全員、ここで死ぬことになるだろう。でも、

本当にそれでいいのか？」

怜央は、答えなかった。

「新宿との戦争は、秒読みだろう？ おまえ一人で、手塚不律に勝てるのか？」

「だから、俺はおまえを殺せない。そういう読みか？ 甘いやつだな」

怜央の声が、さらに厳しさを増した。

「心配してくれて、ありがとう。だが、手塚不律は、他の魔王子との連携で何とかするよ。どう

か、安心して静かに眠ってくれ」

「俺たちは、あんたに逆らおうって言うんじゃない。ただ、今だけは、許してくれないか。後悔はさせないよ。新宿との一戦では、必ず役に立つ」

春彦は、懸命に訴える。龍司は、胸が痛くなった。

「どうだかな。俺が不律に殺された方が好都合なやつと言うことは、まともに聞けねえな」
怜央は、せせら笑う。

「そんなことはない。この二人は、この間の一件以来、不律に狙われてる。俺とその子も、一蓮托生だろう。つまり、俺にとっても、不律が勝つのが何より最悪なんだ。あっさり殺してくればまだいいが、オブジェとかになって生かされ続けるのは地獄だからな」

「そうだな。だから、俺が、格別の慈悲を持って、あっさり殺してやるよ」
怜央の目が、正面から春彦を捉えた。

やられる、と龍司は思った。

春彦の力は、まだ怜央には及ばない。一瞬にして屠られるだろう。その後は俺、そして、美歩とマコちゃんも。

もう、だめだ。

助かる道は、完全に閉ざされた。

死は秒読みになった。

だが、本当にそうか？

頭は、いつになくすっきりと澄み渡っている。身体を雁字搦めにしていた恐怖も消え、状況を素直に、ありのままに見られるようになっていく。

どうせ死ぬなら、やるしかない。

たとえ、確率はどんなに低くても。

春彦は、この土壇場で俺が何をやるか、予想しているだろう。だが、怜央には知るよしもないはずだ。俺など、以前の吉村以下だと馬鹿にしているはずだから。

龍司は、大きく息を吸った。

怜央の注意の百分の一くらいが、こちらに向く。

その瞬間、龍司は、今まで発したことがないくらいの閃光せんこうでフロアを包んだ。

(つづく)